

「博士論文」 可否査定資料

申請者
職・氏名 河村 静江

学位の名称 博士（日本語日本文化）

論文名 日中同形語の対照研究—動詞と名詞のコロケーションを中心に—

審査委員 主 査 村木新次郎

副 査 吉野 政治

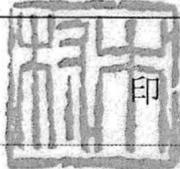
副 査 于 康

審査結果 合

2010.2.2 日本語日本文化専攻博士後期課程委員会 承認
2010.2.2 文学研究科博士後期課程委員会 承認

博士学位論文審査結果報告書

2010年 2月 2 日

学位申請者	河村 静江	
審査委員	主査	村木新次郎 
	副査	吉野 政治 
	副査	于 康 

この論文は、日本語と中国語で、同一の形式をもち、かつ類似した意味をになった動詞の自他の問題と動詞と名詞のむすびつきを対照したものと、日本語の類似する意味領域の漢語と和語のコロケーション上の棲み分けを考察したものである。

本論文は、これまで等閑視されていた語彙文法の領域にふみこみ、しかも大がかりな調査をしたという点で、新鮮かつ斬新である。また、データベースを有効に利用して、両言語および日本語の実態を詳細に調査した点が高く評価できる。

著者の関連領域に対する理解はおおむね確かであり、対照言語学・日本語学・日本語教育学に広範な知識をそなえていることがうかがわれる。

論文は、全体の構成において確固とした形式を整えていて、専門用語の使い方もおおむね妥当である。

本論文は、博士(日本語日本文化)(同志社女子大学)の学位論文として十分な価値を有するものと認める。

博士學位論文内容要旨

2010年 2月 2日

学位申請者	河村 静江	
審査委員	主査	村木新次郎
	副査	吉野 政治
	副査	于 康

(要旨)

この論文は、日中両言語の同形語の動詞に焦点を絞り、その自他の差異とコロケーションの差異を明らかにすること、また、それらに関する誤用と習得状況を明らかにすることを目的とし、調査・分析をおこなったものである。

第一章では、日中両言語の動詞の自他について概観している。日本語の漢語サ変動詞の自他について問題となることは、自他の「ゆれ」が、基本的に動詞自体に自他の区別がある和語動詞に比べて多く見られることであり、中国語の自他について問題となることは、日本語のような名詞の格範疇をもたないことや複数の品詞を兼ねる「兼類」の問題があること、また、「自然受動文」と呼ばれる受身のマーカー“被”を用いない文が多く見られ、このような文が自動詞文のように見えることから、自他の判断が非常に困難であるということである。日中両言語の対照研究をおこなうにあたって、日本語では『明鏡国語辞典』、中国語では『HSK词语用法详解(以下『HSK』と略す)』によって自他の判定をしている。『HSK』を用いて2字の日中同形動詞(自動詞(Vi)・他動詞(Vt)・自他両用(ViVt)と記されているもので、離合動詞や自他が記されていないものなどは含まない)を取り出した後、『明鏡』で日本語の自他を調査し、(1)日本語・中国語とも自動詞のもの(2)日本語・中国語とも他動詞のもの(3)日本語では自動詞で中国語では他動詞のもの(4)日本語では他動詞で中国語では自動詞のもの

の (5) 日本語では自他両用で中国語では自動詞のもの (6) 日本語では自他両用で中国語では他動詞のもの (7) 日本語では自動詞で中国語では自他両用のもの (8) 日本語では他動詞で中国語では自他両用のもの (9) 日本語・中国語とも自他両用のものに分類し、用例を挙げて考察を加えている。

さらに、自他両用動詞の他動性について新聞のデータベースを用いて調査を行っている。45 語の動詞を対象とし、日本語・中国語それぞれ用例を 100 例ずつ取り出し、その使用頻度をもって他動性を判断し、用法の差異を記述している。結果としては、日本語、中国語ともに他動詞的なものに「消化」「破壊」「緩和」など、日本語、中国語ともに自動詞的なものに「営業」「開会」「破損」など、日本語、中国語ともに自他のバランスがとれているものに「解散」「繁殖」「分解」など、日本語と中国語の自他のバランスがとれていないものに「満足」「感謝」「固定」「発展」「通過」「停止」などの動詞が挙げられた。調査の結果から、自他両用動詞の中にも他動詞としての用法が多いものと自動詞としての用法が多いものがあることを明らかにしている。

第二章では、まず、コロケーションの定義について、英語・日本語・中国語の諸研究に言及し、本発表での定義をしている。英語・日本語・中国語の各言語においてコロケーションの定義は研究者によってまちまちであり、一定したものが見られないと著者はいう。

次に、中国語と日本語の漢語のコロケーションの差異について調査及び分析を行っている。調査対象は日本語も中国語も他動詞のもの計 12 語で、一つの動詞につき、1000 例ずつ新聞のデータベースから名詞(目的語)の用例を収集している。『分類語彙表(増補改訂版)』を用いて意味分類を行い、日中それぞれの動詞がどの分野の名詞と結びついているのかを調査した結果、「使用」「開発」といった動詞は日中両語ともかなり広い分野の名詞と結びつき、またコロケーションにも大きな差が認められなかったのに対し、「発揮」「提出」といった動詞は、日中両言語とも結びつく名詞が狭い分野にとどま

ること、またコロケーションにも大きな差異が生じていることが確認されている。

さらに、「授受表現」と「取得表現」を例として、日本語の中の和語と漢語のコロケーションの棲みわけについて調査し、分析している。「授受表現」の調査対象は他動詞のもの計48語（和語19語・漢語29語）で、「取得表現」の調査対象は同じく他動詞のもの計33語（和語8語・漢語25語）で、いずれも新聞のデータベースを用い、動詞と結びつく名詞（目的語）を各々200例取り出し、『分類語彙表（増補改訂版）』を用いて意味分類をしている。「授受表現」については、和語においては「あげる」「ゆずる」「さずける」などといった語が結びつきの自由度が高く、「みつぐ」はかなり自由度が低く、また漢語については、和語と比べると自由度が低く、棲みわけがかなりはっきりと認められる。「取得表現」については、和語においては、「うしなう」「とる」「なくす」などは名詞が20分野以上であり、結びつきの自由度が高いものが多く見られるが、漢語においては、「略奪する」などが比較的自由度が高いものの、「拿捕する」など、結びつく名詞が固定化しているものが比較的多く見られるという。

最後に、中国語と漢語と和語の間に見られるコロケーションの差異について調査、分析している。研究方法としては、『HSK』で他動詞とされているものの中で、2字の日中同形語であり、かつ、日本語との意味に大きな差異がないと判断した類義語を取り出している。さらに、その漢語動詞に意味において大きな差異がないと考えられる和語動詞があるものを研究対象としている。調査対象はいずれも他動詞のもの20語である。新聞のデータベースを用い、それらの動詞と結びつく名詞（目的語）を各々200例取り出し、さらに『分類語彙表（増補改訂版）』を用いて意味分類をおこない、それぞれの動詞がどの分野の名詞と結びついているのかを調査している。中国語・漢語・和語のコロケーションにおける差異が比較的大きいものは「獲得」「教育」「激励」「収集」「認識」「喪失」「奪取」などで、比較的小さいものは「確認」「拒絶」「使用」「調査」「促進」「防止」などである。「激励」「称賛」においては、特にヒトに関わる名詞との強い結び

つきが見られ、「建設」「使用」においては、特にモノに関わる名詞との強い結びつきが見られ、「促進」「承認」においては、特にコトに関わる名詞との強い結びつきが見られるという。

第三章では、実際に日本語学習者がどのような誤用をおかしているのか、また、日中両語で動詞の自他やコロケーションが異なるものについて、どの程度習得が進んでいるのかについて調査、分析を進めている。

まずは、中国語母語話者の作文に見られる日中同形語の動詞を対象に、どのような誤用が見られるのかを調査している。調査したのは、日本語を専攻している2、3年生の書いた作文325編であり、そのうち、なんらかの誤用が見られたのは90例(27%)である。調査の結果から、品詞・自他・助詞・語彙・コロケーションに至るまで、中国語の体系をそのまま持ち込み、誤用となっているものが多く見られることを明らかにした。母語の干渉が見られないものについては、「反転」「討論」の例のように、中国語を日本語らしく訳そうと努力した結果、日本語でも不自然な表現となっているものや、「～が重視する」の例のように、日中両語ともに他動詞であるにもかかわらず、自動詞・可能文・受身文などとの混乱が見られるものや、「両親に拘束した」の例のように、中国語でも“被”を用いた受身形が作れるにもかかわらず、受身形になっていないものなどが見られたという。

次に、文法的にずれのある動詞を中心に、○×形式の正誤判断テストを用いて、学習者の誤用と習得の傾向を探っている。調査対象は台湾と中国の大学生で、テストした動詞は全部で38語あり、それぞれの動詞に3つ或いは4つの例文をつけ、正しいと思ったものに○、誤っていると思ったものに×をつけさせている。誤答率が正答率を上回った動詞には「祝福」「信賴」「違反」「従事」「尊敬」「感染」などの動詞がある。日中両語で用法に文法的ずれがあるものがすべて正答率が低いとは言えず、「流行」「発生」などの「～が」をとる動詞はかなり正答率が高い。また、「着陸」「移民」「接近」「自首」

「求婚」なども正確に回答でき、「信頼」「尊敬」など人を対象にとる動詞の場合は正答率が低く、「～に」を選択する学習者が多かったことを報告している。

次に、コロケーションに差異のある動詞を中心に、同じく○×形式の正誤判断テストを用いて、学習者の誤用と習得の傾向を探っている。調査対象は台湾の大学生で、テストした動詞は「獲得」「発揮」「実施」「提出」の4語であり、それぞれ6つずつ例文をつけ、正しいと思ったものに○、誤っていると思ったものに○をつけさせている。正用の場合はかなり正答率が高かったが、誤用の場合は、特に「離婚を提出」「作用を発揮」「観念を提出」「方針を実施」においては正答率が30%以下とかなり低かったという。文法・コロケーションのいずれの調査においても、学年が上がっても依然として誤用が見られるという結果を得ているが、この結果は日本語教育において日中同形語の用法の差異についての認識が低く、指導が十分になされていないことを示唆していると指摘する。

博士学位論文審査結果要旨

2010年 2月 2日

学位申請者	河村 静江	
審査委員	主査	村木新次郎
	副査	吉野 政治
	副査	于 康
論文題名	日中同形語の対照研究 —動詞と名詞のコロケーションを中心に—	
<p>この論文は、日本語と中国語で、同一の形式をもち、かつ類似した意味になった動詞の自他の問題と動詞と名詞のむすびつきを対照したものと、日本語の類似する意味領域の漢語と和語のコロケーション上の棲み分けを考察したものである。本論文は、考察対象を対照・比較するという研究方法がとられ、対象の異同に言及されている日中対照言語研究と日本語学にかかわるものである。著者は、台湾の大学で専任の日本語担当教員として勤務した経験があり、また現在も日本の大学で留学生に対して日本語を教えているので、外国人とりわけ中国語母語話者による日本語学習の問題に通じている。本論文は、著者の経験を生かした日本語学習における母語の干渉にも言及した日本語教育にかかわる論文でもある。随所に、日本語教育にかかわる提言をしている。</p> <p>第一章では、日中両言語の動詞の他動性を、第二章では、動詞と名詞の結びつきを、第三章では、中国語母語話者による日本語の誤用例を調査し、それに分析をくわえている。第一章と第二章でとりあげられた対象は、両言語の新聞のデータベースから採集した用例を記述し、分析をほどこしている。</p>		

日中同形語の研究は、数多く存在するが、語彙に関するものがほとんどで、文法に言及したのは少ない。文法といっても、語彙的な側面をとりこむ語彙文法といえる実用文法にかかわる領域である。本論文は、これまで等閑視されていた語彙文法の領域にふみこみ、しかも大がかりな調査をしたという点で、新鮮かつ斬新である。また、データベースを有効に利用して、両言語および日本語の実態を詳細に調査した点も評価できる。

第一章は、日中両言語の動詞の他動性をとりあげている。両言語ともに、自他をめぐるさまざまな解決のむずかしい問題があり、自他の区別は自明ではない。著者は、自他に関する諸問題を整理したうえ、結局は、中国語では『HSK』に、日本語では『明鏡国語辞典』(3)『旺文社国語辞典』(4)にしたがっている。調査を進めるにあたって、対象の判定を信頼できる辞書に依拠するというのも一つの研究方法であろう。日中の同形動詞を自他の点から9つのタイプに分類できるとした。いずれも具体例がしめされていて、分類の結果が信頼できる。

中国語における動詞は、自他両用のものが多いのが特徴である。日本語の和語動詞の多くは、自他両用のものはごく少数で、ほとんどが自他いずれか専用である。一方、漢語動詞には、中国語の特徴を日本語にもちこんでいて、自他両用のものが多くみとめられる。著者は、日中両言語において、自他をめぐるタイプ分けに終わるのではなく、自他両用の動詞の中で、双方のバランスがとれているもの、他動詞に傾斜するもの、自動詞に傾斜するものを計量的にしめしている。これは辞書からは分からず、現象を調査してはじめて得られる知見である。

第二章は、本論文の中核をなす部分で、日中両言語における動詞と名詞のコロケーションを対照している。コロケーションの定義はさまざまであるこ

とをふまえ、「慣習的に共に用いられる（2語以上の）語の結合体であり、その語は自立語を指す」と定義した。本章での特徴は、日中両言語の同形語の対照であれ、日本語の和語と漢語の比較であれ、データベースを活用して多数の実例を調査して、その結果をしめしていること、動詞とむすびつく名詞の意味タイプを調べ、その広がり(自由度という用語が使用されている)をみていることである。このような調査は、時間と労力のかかるものであり、提示された研究成果は貴重である。

日本語の和語と漢語のコロケーションにおいては、〈授受〉と〈取得〉に関わる動詞について、上下・公私・対象（金銭／ヒト／モノ／コト）を指標に使って、巧みにタイプ分けしている。語彙的な側面を加味したコロケーションの研究として注目される。

第三章は、日本語学習者の誤用と習得状況をあつかっている。この種の問題は、しばしば散漫な報告となる傾向があるのだが、著者は問題点を整理して、文法にかんするものと語彙にかんするものとをきちんと分けてとりあげ、誤用の原因に言い及んでいる。日本語教育の分野を専門とする著者ではあるが、日本語学の基本的な知識に支えられていて、論文の質を高めている。

この論文は、著者の過去に発表されたものを集めたものである関係上、記述の無用な重複や齟齬が散見するのは惜まれる。現象の記述にくわえて、さらに根拠への問いかけへと進むことが期待される。

著者の関連領域に対する理解はおおむね確かであり、対照言語学・日本語学・日本語教育学に広範な知識をそなえていることがうかがわれる。

論文は、全体の構成において確固とした形式を整えていて、専門用語の使い方もおおむね妥当である。

本論文は、博士(日本語日本文化)(同志社女子大学)の学位論文として十分な価値を有するものと認める。

試問結果の要旨

2010年2月 2日

学位申請者	河村 静江	
審査委員	主査	村木新次郎 
	副査	吉野 政治 
	副査	予 康 

審査員3人は、2010年2月2日午後1時から、学位申請者河村静江氏に対し、本論文に関する公開の試問を行なった。はじめに、申請者による口頭での論文要旨の発表があり、続いて審査員から同形語をどのようにとらえるのか、コロケーションをどう位置づけるか、日本語の中の漢語をめぐる問題などの質問や疑義に対して、申請者は概ね的確な回答をした。回答を通して、申請者が中国語と日本語の言語現象に対して深い理解と見識をもっていること、事例を鋭く分析する能力を備えていることが確認された。よって、本論文の提出者河村静江氏が博士（日本語日本文化）（同志社女子大学）の授与に値する十分な学力を有するものと認める。